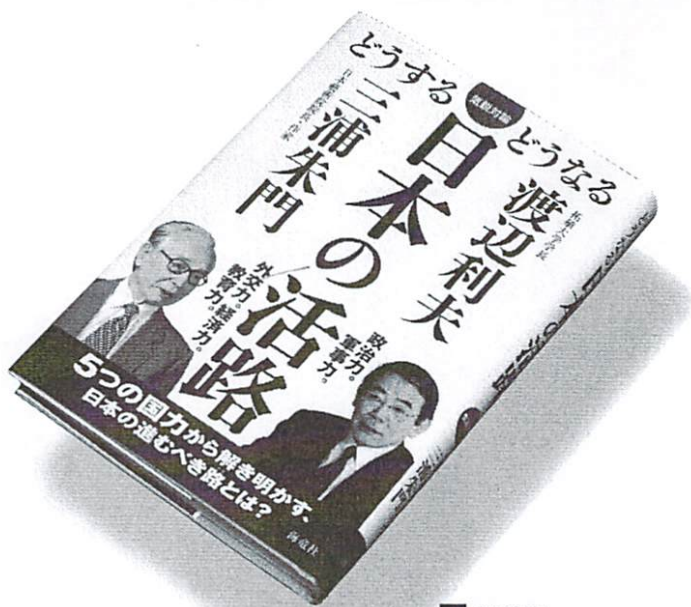


# 『どうするどこうなる』

## 日本の活路

三浦朱門・渡辺利夫 著



海電社  
1470円(税込)

七月の刊行で書名も体裁もどちらかといえば「軽装」だが、この夏読んだ本で最も読みごたえがあったのは何か、といわれれば本書にとどめを刺す。ぎっしり実がつんだ緊張感あふれる対論なのだ。

国家意識も安保感覚もふわふわした民主党政権がスタートした秋、この本の持つ意義は一層高まったといっている。

対論しているのは日本芸術院院長と拓殖大学学長。ともに当代日本の

保守的良識を代表する碩学せきがくの論客である。日本の政治力、軍事力、外交力、経済力、そして教育力という五つの国力について、火花を散らして語り合う。ともに深々とした歴史理解に基づいているから、大いに勉強になった。

国家というのは組織でもあり、地域でもあり、人間でもある。どれにも共通するけれどどれとも言い難いというので「国家」という言葉を日本人は作った。「国家」という言葉は日

評者：石井英夫

いしい ひでお  
1933年生まれ。55年産経新聞社に入社。産経新聞論説委員時代は、人気コラム「産経抄」の執筆を30年以上にわたって担当した。日本記者クラブ賞、菊池寛賞受賞。著書に「日本人の忘れもの」(産経新聞社)など多数。

本製の日本語ではないか(三浦)という指摘にへエと感心する。

コリアなどは族譜(チョッポ)と本貫(出自の起点)にこだわって、血族ナシヨナリズムと門閥間抗争に明け暮れている。それに対し日本は明治維新と廃藩置県が「国家」を作り上げた(渡辺)。中国はいま中華帝国維持のコストに耐えかねて帝国分裂の可能性が大きいが、しかし覇権主義「量の中国」パワーはあなどれない。

ところがいまの日本の国民は、日本人のアイデンティティを持たず、国家意識が希薄で惰眠を貪っている。こんな状態では中国にのみこまられてしまう。いまこそ国家意識を取り戻す時、と二人はこもごも訴えている。

軍事力といえは北の核ミサイルが日本に照準を合わせる日は近く、専

守防衛では日本は守れない。「いつでも持てる」という核保有の工程表を作れ(渡辺)と。

また沖縄の反米、反本土感情は小さくなく、県民はマインドコントロールされてジャーナリズムの自由がない(三浦)。根本の議論は何かといえ、「そんなに日本が嫌なら、沖縄よ、独立してみよ」と渡辺は大胆に言い切っている。エ? 先生、そんなこと言っていないんですか。いやこれぞ本質を衝く勇氣ある諫言かんげんでなくて何であるか、と言いたい。

日本は敵対国家群に囲まれているというのに、人びとは国家を論じることもなく、ナイーブな「地球市民」などを平気で口にする。これも愚民化政策「ゆとり教育」のもたらした弊害で、若者はのっぺりした平等主義による共同体意識欠如に陥っている

という。

「らしさ」の崩壊の行き着く先は根無し「個」であり、若者はふわふわした風潮に流されている。いまこそ自国に誇りの持てる教育をせよと二人の対論者は強く主張している。大いに耳を傾けるべきだろう。

「冷戦終焉後の日本の現在ほど、国際社会の中を行方定まらず漂流をつづけた時代はこれまでなかったのではないか」

対論者の渡辺利夫氏は「まえがき」でそう述べているが、さて政権交代の民主党内閣はその漂流をとめることができるか。いや、安全保障政策もおぼつかない政権に期待するのはむりだろう。イカリも羅針儀も救命ボートも失って、暗夜の漂流を続ける危惧はさらに強まっている。

だから、この対論の値打ちがある。